八王子市郷土資料館だより

vol.96
2014.12
HACHIOUJI CITY HISTORICAL MUSEUM NEWS

古い写真を読む ㉘　　八王子の女子野球チーム「乙女クラブ」(昭和５年ごろ)

芸妓さんにより結成された野球チーム「乙女クラブ」の集合写真である。胸のハートマークには、「乙女」と入っている。ボールは軟式球を使用し、履物は、足袋型の運動靴、撮影地は、八王子三業組合見番(けんばん)事務所前だろう。

昭和5年(1930)、乙女クラブは、市内のカフェで働く「スタークラブ」と対戦し、両者は、毎朝、富士森球場で練習していたという。

八王子市民が初めて野球をプレーしたのは、明治の終わり頃とされ、大正末には、オール八王子選手団選出のファン投票も行われたほど盛んであった。

なお、女子野球の2チームが、実際に対戦したのは。昭和5年の一度のみであったという。(こん)

目次

表紙　古い写真を読む ㉘
　　八王子の女子野球チーム「乙女クラブ」
P 2　幕末の八王子と彗星～幕末の八王子を読み解く～
P 3　幕末に現れた流行神
P 4　多摩周辺の史跡名勝案内と八王子史談会
P 6　1964　東京オリンピックの自転車競技
P 8　《八王子の文化財》　清鏡寺の豊臣秀吉禁制

幕末の八王子と彗星～幕末の八王子を読み解く～

加藤　典子

八王子に残る日記類には、しばしば彗星（すいせい）に関する記載がみられます。特に幕末には彗星が頻繁に出現しました。嘉永６年 (1853) から慶応４年 (1868) までに５つの彗星が観測されています。

彗星とは成分の８割が水 (氷) からなる小天体です。太陽系の惑星とは異なる公転軌道を持つ彗星は、惑星創世期に取り残された氷や塵によって形成されました。太陽に接近すると溶けはじめ、淡い光が後ろに尾をひいて箒のようにみえることから、箒星（ほうきぼし）ともいわれます。

千人同心伊藤家に残る「随筆」には嘉永６年７月に彗星を観測した記事がみられます。「嘉永丑年七月九日頃より廿日頃迄之間暮六ツ時より六ツ半頃迄酉戌之方へ異星出る」とあり、彗星の絵が描かれています。７月９日から 20 日までの間、日没に西から西北西にかけて彗星が出ました。絵には彗星の尾が約３メートルであったと書かれています。この彗星はクリンカーフューズ彗星 (C/1853 L1) といって、日本で確認されたのは浦賀沖にペリー艦隊が来航した時期と重なります。人びとは悪い出来事の兆候として恐れました。

次に彗星が観測されたのは、安政５年 (1858) 8月です。これは、ドナティ彗星 (C/1858 L1) といって、８月から９月にかけて観測された極めて明るい彗星でした。小比企村の名主をつとめた磯沼家では磯沼雄太郎が彗星を観測しています。雄太郎は「八月上旬より当家より戌之方に当て箒星出る、入合 (入相) の鐘之頃より出気の立事甚し、段々西之方へ近りコロリの止む頃にいつとなく見へ不申、入合之頃より出五ツ半時頃には見えず、甚しきさかりには実に気味わろく言語に尽し難し」と記しています。彗星は、小比企村からみて八王子城跡方面に８月上旬の日没頃より見えはじめました。彗星の出現位置は日付の経過とともに西の空へ移り、コレラの流行が終息する頃に見えなくなったことがわかります。

安政５年はコレラが流行した年でもありました。雄太郎はコレラについて「七月下旬より江戸は不及申相州・信州・甲州辺悪病流行人の死する事甚し、其内にも御府内別而甚し、此病名コロリと云、始めは三日位にて死、後には半時位にて死す、其苦しみ甚しといふ、十月頃に至迄漸々止む」と記しています。コレラは重症下痢を主症状とする伝染病で 19 世紀には世界的に流行しました。日本では文政５年 (1822) に西日本を中心に流行し、安政５年の２回目の流行で全国的に拡大しました。

八王子のコレラ流行については、当時の日記に記されています。千人同心粟沢汶右衛門の日記には「八月頃よりころりと申病気流行、御府内にて人多く死す、凡三拾万余人と申事、八王子近在にても村柄に寄人多く死、其中にも郡内谷村辺は多分有之候由に及承候事」とあり、八王子や山梨の都留（つる）郡周辺でも発生したことがわかります。さらに、上恩方村名主の尾崎家の日記には、コレラの予防方法や効果のある薬についての情報や病気の発生源について記されています。「豆州下田辺より三嶋・沼津・東海道筋小田原辺等は不及申、郡内谷村辺は殊之外流行」とあり、東海道や甲州道中などの道を移動する人びとを媒介として各地に広まったことがわかります。幕末に人の移動が活発化した背景には、異国船来航による警備人足の増加などが関係していました。開国とコレラの流行には密接なかかわりがあったのです。

大変革期の日本で頻繁に観測された彗星は、異国船の来航やコレラ流行と観測時期が重なったこともあり、不吉の前兆として忌み嫌われました。また、政治の悪化とも関連して理解されるようになります。偶然観測された彗星ですが、江戸時代の人びとの心を大きく動かすことになったのです。

※左図は伊藤家「随筆」に残るクリンカーフューズ彗星。右図は文久元年５月下旬に観測されたデバット彗星 (C/1861 J1) で磯沼雄太郎の日記から北斗七星近くに出現したことがわかる。

幕末に現れた流行神（はやりがみ）

美甘　由紀子

幕末の慶応３年（1867）１月、上椚田村字原（現・東浅川町）の石川家の畑から一基の板碑が掘り出されて「流行神（はやりがみ）」となり、多くの参詣者を集めました。流行神とは、何らかのきっかけで突然に熱狂的な信仰を集める神仏をいいます。

ことの始まりは、１月13日、石川元右衛門が山にくず掃きに行く途中、知り合いの百姓が土蔵の塗り土を採るためにあけてしまった大きな穴を埋め戻す作業をしているところに出くわしました。東谷戸にある石川家の畑には、塚が一つありました。邪魔な塚だったのでしょう。元右衛門は、この塚の土も穴を埋め戻すのに使ってくれないかと申し出ました。この申し出に百姓は、早速息子や下男を連れて塚の土を掘りにかかりました。するとその塚から板碑が出てきたのです。

この出来事は、石川家の人々にとって大事件でした。石川元右衛門は、事の詳細を記した一冊の帳面を残しています（写真）。息子の喜兵衛は「石川日記」（註①）に綴り、当時24歳だった孫の源助は、後に「石川源助翁一代之略記」に記しています。これらの記録によると、塚から掘り出されたものは、「板仏のようなもの」（「石川日記」）で、「青色薄石に梵字一字蓮華座（れんげざ）及嘉元四年三月日と彫刻して有る」（「石川源助翁一代之略記」）と記されており、鎌倉時代（1306）の板碑であったことがわかるのです。当時は、「板碑」という言葉も知られておらず、とても珍しかったのでしょう。板碑を見に来る人が石川家の畑までやってきて、２月の上旬にはご利益があるといわれて評判を呼び、流行神となったのです。畑の端には、何人もの商人が店を出して、線香や清水などを売り、遠近からの参詣者が大願成就の大小の旗をたてたり、絵馬を納めたりと大変な賑わいとなりました。一日に200人もの参詣者が訪れる日もあり、賽銭も集まりました。「石川日記」の２月４日の項には、「東谷戸仏様へ参詣之（の）者所々より沢山参り候」と書かれています。　石川家では、参詣者が畑を踏みあらすので、困ってしまい、板碑を泰原庵（たいげんあん）（現・原町内会館）の庭に移しました。泰原庵は、旱魃（かんばつ）や疫病の流行などの際に念仏や祈祷が行われる庵で、説法や寺社の出開帳、講の寄り合いや村の集会の場ともなりました。当時は、和尚と数人の信者が住んでいたようです。しかし、板碑を移動後、参詣者は徐々に少なくなってしまいました。その様子は「雪霜の消るが如く自然と薄々に成」と書かれています。

流行神の信仰は、急に衰退してしまい、永く続かないことも特徴です。石川家の畑で掘り出された板碑は、流行神の典型といえるでしょう。

幕末の慶応年間は、世情不安が続きました。前年の慶応２年には、秩父の名栗から始まった一揆勢が八王子を目指し、多摩川の築地渡船場で代官の江川太郎左衛門らにより阻止されるという事件が起きています（武州世直し一揆）。この余波を受けて、上椚田村でも豪農として知られ質屋を営んでいた山口安兵衛が、生活に困った農民から質物の返還や利息の引き下げを直談判で迫られるという事件が起きています。このような時期に畑から予期せず突如として現れた一基の板碑は、人々の関心を集め、新たな霊験あらたかな仏様としてご利益を期待されました。しかし、泰原庵に移されたのをきっかけに、信仰は徐々に薄れていきます。板碑が、掘り出された畑を離れて泰原庵という地域の信仰の場に納められてしまったことで、かえって人々は板碑に霊験を感じなくなってしまったのかもしれません。板碑は半年後の７月に石川家の地所へ

写真：石川元右衛門が記した帳面の表紙には、掘り出された板碑が描かれている。（石川恵一氏蔵）

註①　享保５年（1720）から東浅川町の石川家で代々の当主により書き継がれている日記。

多摩周辺の史跡名勝案内と八王子史談会

中村　明美

八王子にはさまざまな史跡名勝があり、観光地として多くの観光客が訪れています。昭和初め頃に盛んとなった史蹟名勝めぐりはどのように始まったものなのでしょうか。

明治後半からの地方改良運動の中で郷土性が強調され、「史蹟」は重要な位置を占めていきます。東京府では大正７年(1918)に「史的紀念物（文書・記録・金石文・地図・絵書・彫刻・棟札・制札）天然紀念物(動物･植物･地質)勝地(景勝地)保存心得」が公布され、史蹟の保存が本格的に行われるようになり、市区町村が史蹟等の調査と保存・維持につとめることが指示されました。その後東京府では、史蹟を保存し愛護し愛国の精神を養い育て祖先の文化を理解するために、史蹟名勝天然紀念物を調査し、報告書を刊行していきます。

そのような時代の流れの中で、大正11年(1922)8月、事務所を府立第二商業学校(現・都立拓真高等学校)に置き、八王子近隣の郷土史を調査研究することを目的とした「八王子史談会」が結成されました。地方史にまだ眼が向けられていない時代に、様々な人が郷土の歴史について勉強する場として、講演会や展覧会および史蹟調査のための見学会などを開催し、史料の発表や研究活動を行いました。その活動の一部を紹介すると、大正11年11月に第24回東京府連合教育会の府立二商での開催にあわせて、八王子史談会・府史跡調査係との合同主催で史料展覧会を開催します。八王子の教育文化運動とのつながりもあり、恩方村青年団の協力による恩方方面への史跡踏査（大正13年）を行ないます。また史蹟保存の機運の高まりから、明治13・14年に明治天皇が八王子に駐蹕(ちゅうひつ)されたことを記念した明治天皇聖跡碑の除幕式を挙行し記念誌を発行（大正14年）するなどその内容は意欲的なものです。

史談会の幹事として中心的な位置にいた天野佐一郎(1876～1960)とは、どのような人物だったのでしょうか。明治９年多摩郡図師村(現・町田市)に生まれ、多摩地域の学校で教員経験を積んだ後校長となり、漢文及び書道の教師として東京府立第二商業学校に招かれます。そこで勤務のかたわら八王子史談会を設立し、八王子で25年間暮らしました。漢詩文になれ親しんだ天野佐一郎は、八王子市や町田市にある史跡の石碑の揮毫(きごう)や撰文(せんぶん)者として名前が残されており、教育者のほかに郷土史家の顔を持っています。

大正15年(1926)12月25日に大正天皇が崩御し、元号は昭和と改められました。これまでの天皇陵は近畿地方を中心としていましたが、昭和2年1月3日に東京府南多摩郡横山村・浅川村・元八王子村(現・廿里(とどり)町・長房町・元八王子町の

『多摩御陵史蹟のしるべ』
昭和２年２月６日発行
中町にあった市川写真館の発行によるもので、写真で掲載した他に、多摩の横山、多摩陵附近や八王子の地名、龍ケ谷戸(多摩陵南側の谷)千人隊、十々里の合戦、長泉寺(長房町)、白山神社(廿里町)、八王子城址、宗関寺、八幡神社(元八王子町)、高尾山、真覚寺などについての解説が添えられている。

日山登山城

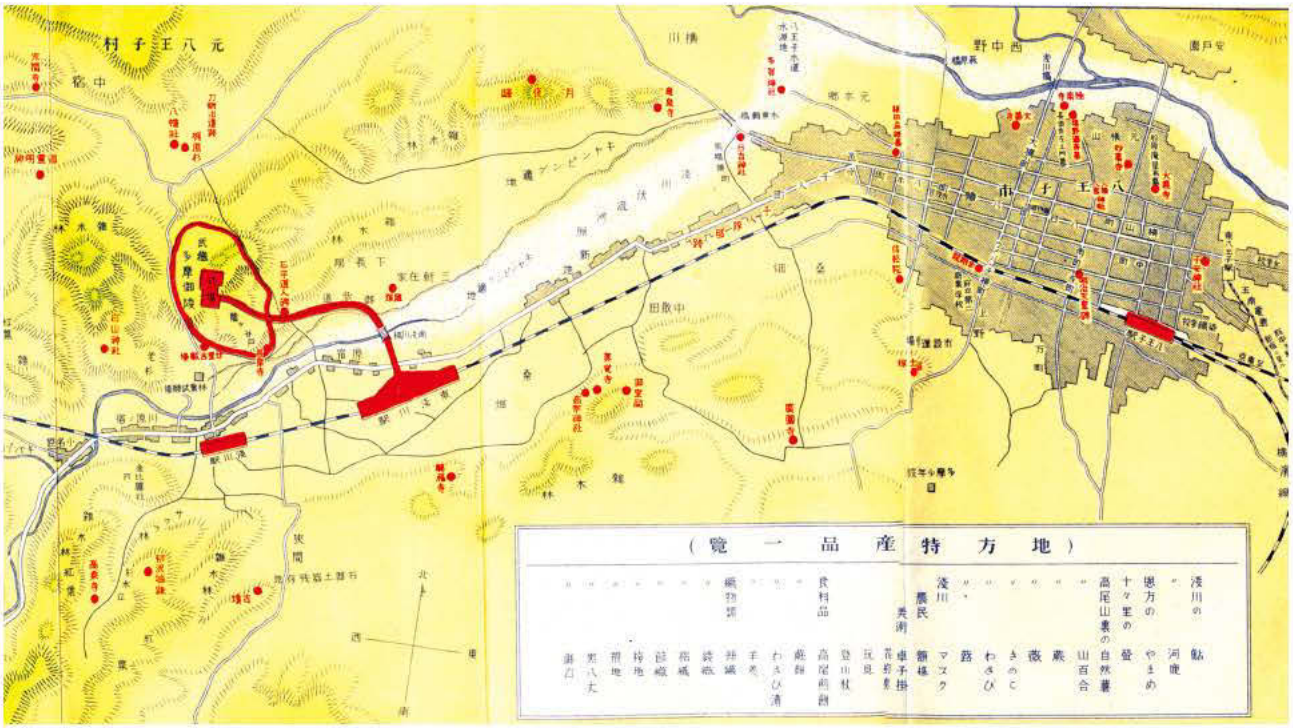
十々里古戦場

一部）にある御料地に「武蔵陵墓地」を築くことが決定されたのです。工事は2月3日には完了し、大喪は2月7日と8日に行われました。大正天皇陵は「多摩陵（たまのみささぎ）」として、2月13日に一般参拝が許され、全国から多くの参拝客が押し寄せ、八王子は全国にその名が知られることとなります。高尾山ケーブルカーは昭和2年1月21日にすでに営業を開始していますが、観光客を輸送するために交通機関が整備されていきます。

多摩陵を中心とした八王子市周辺の観光地を紹介するために、様々な周辺史蹟名勝観光案内書や絵葉書が刊行されます。内務省や鉄道省発行のもののほか、八王子史談会が関わった案内書があります。史談会の幹事であった天野佐一郎、清水庫之祐は多摩陵ができる以前から『東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告書』の編纂に携わっており、多摩陵周辺の歴史や史蹟に精通していました。八王子史談会は多摩陵墓付近の史蹟調査のために訪れた、鳥居龍蔵が主宰する武蔵野会や東京帝国大学教授の調査の案内役を務めています。天野佐一郎が述べ記した多摩陵関係の案内書には、『横山史蹟』（八王子市役所　昭和2年1月15日発行）、『多摩御陵史蹟のしるべ』（市川写真館　昭和2年2月6日発行）、『多摩の史蹟』（帝都地理歴史協会　昭和2年3月10日発行）（写真参照）、『武蔵御陵附近史蹟案（天野佐一郎・清水庫之祐・逸見敏刀著　武蔵御陵附近史蹟案内編纂会　昭和2年3月20日発行）があげられます。なかでも『横山史蹟』は大喪師総裁閑院宮殿下の依頼を受けた八王子市が、昭和元年12月30日天野佐一郎に編纂を依頼したもので、江戸時代の地誌書である『新編武蔵国風土記稿』と『武蔵名所図会』、古文書、金石文などを参考に起稿しています。また昭和2年1月12日から八王子史談会幹事である逸見敏刀が東京日日新聞において多摩陵周辺の史蹟や歴史を紹介する「史蹟の宝庫　新陵墓附近巡礼」を連載し、翌昭和3年連載記事をまとめた『多摩御陵の周囲』を発刊するなど、八王子史談会は幅広い活動を行いました。このような史蹟の保存研究活動は全国で盛んとなり、昭和の初めには郷土の研究熱へとつながり、郷土中心の教育が盛んとなります。八王子市では学校での郷土教育の資料として、昭和7年に『八王子の郷土資料』が発行されます。

自分の住んでいる郷土の歴史を、身近な史蹟から学び、歴史に想いをはせるといった楽しみは昔も今も変わらないものです。

［主な参考文献］『案内図にみる多摩陵・高尾と八王子』八王子市教育委員会　2006、『郊外行楽地の誕生』パルテノン多摩2002、「あるく郷土史家、天野佐一郎」解説シート　町田市立自由民権資料館　2012、『多摩のあゆみ100号』2000, 八王子市郷土資料館だよりNo.89「明治天皇の聖跡碑」2011　ほか



1964　東京オリンピックの自転車競技

小林　央

昭和 39（1964）年 10 月 10 日、日本で開催する初めてのオリンピック大会の幕が切って落とされました。その開催は、戦前からの念願でもあり、誘致から開幕まで足掛け約 30 年に及ぶ国をあげての悲願でした。その経過や取り組みについて、及び八王子で行われた自転車競技の会場や施設、ロードレースコースなどについては、特別展図録『オリンピックがやってきた！』に譲ることとし、ここでは 1964 東京オリンピックの自転車競技について記しておきたいと思います。

【実施種目】当時のオリンピック自転車競技の種目は、大別すると競技場（トラック）で行うピスト競技と一般道路を使用するロードレースがありました。ピスト競技は現在の陵南公園に建設されたバンクで以下の 5 種目が、ロードレースは八王子周辺の一般道を使用して個人と団体の 2 種目が行われています。

写真 1　4000 m団体追抜のレース

■ピスト競技

① 1,000 mタイム・トライアル

1,000 mを単独で走り、そのタイムを競う。

②スクラッチレース

複数名で決められた周回をして、最後の 200　m で勝敗を決める。途中での位置取りをめぐる駆引きが勝敗に大きく影響し、相手を牽制するレースが最後の 200 mまで続く。

③タンデムスクラッチレース

二人乗り自転車で行うスクラッチレース。

④ 4,000 m個人追抜

２名の選手がホームストレッチとバックストレッチから同時にスタートし、4,000 mで追いつけば勝ち。追いつかない場合はタイムの早い方が勝ちとなる。

⑤ 4,000 m団体追抜

個人と同じ 4,000 mを 4 人 1 チームで競い、チーム内の 3 人目の選手が相手チームの 3 人目に追いつくと勝ち。追いつかない場合は 3 人目のタイムで勝敗を決める。コーナーを使っての先頭交代が作戦の鍵を握る。

■ロードレース

①個人ロードレース

194.832km（1 周 24.354km のコースを 8 周）を走りきるタイムで競う。

②団体ロードレース

1 チーム 4 人がチームごとに 1 分おきにスタートし、109.893km（1 周 36.631km のコースを 3 周）を走る。チーム中の完走した 3 人目の選手の記録（タイム）で順位を争う。

写真 2　タンデムスクラッチレース

これら実施競技には、現在オリンピックでは見られないタンデムレースもありました。この種目は、オリンピックでは 1972 年のミュンヘンオリンピックまで実施されていました。今日でも障害者スポーツとしてのパラサイクリングや大学生の競技大会において実施されています。

また、このタンデム自転車で前部に乗車する人はキャプテンまたはパイロット、後部に乗車する人はストーカー (英 : Stoker) またはコパイロット (英 : co-pilot) と呼ばれ、この呼称関係・役割分担は飛行機と同じく機長・副操縦士の関係といわれます。障害者競技の場合、健常者がパイロットとして前席に乗り、視力障害者のサイクリストはストーカーとして後席に乗って行われています。

タンデム自転車は、2 人で漕ぐことで出力が倍になる一方で、空気抵抗はあまり増えないため、1 人乗り自転車と比較して高速での走行が可能となりますが、2 人分の体重や脚力に対応するために丈夫な構造が求められるために車重は重く作られています。そのため高速での安定性に優れているのですが、低速走行や小回り、登坂走行には不向きです。

写真３　日本チームのタンデム自転車

【実施日程】八王子競技場には隣接して選手村の分村がおかれ、38ヵ国、宿泊者数では408人が利用しました。代々木の本村と同じく9月15日に開村し、17日にはスペインチームの一行11名が早々に入村しています。各国のチームは用具の点検やコースの下見、練習等に費やし、10月14日からの試合に臨みました。自転車競技は残念ながらあまり天候には恵まれず、特にピスト競技は雨のため予定を変更しながらの運営となりました。それぞれの競技の実施日は以下の通りです。

日にち	曜日	天気	種目
14日	水	雨のち曇	団体ロードレース
16日	金	晴	4000ｍ個人追抜予選
			1000ｍタイム・トライアル決勝
			4000ｍ個人追抜決勝
17日	土	晴	スクラッチレース予選
18日	日	雨	**中止**
19日	月	晴	**18日の競技を実施**
			スクラッチレース予選
			4000ｍ団体追抜決勝
			スクラッチレース決勝
20日	火	雨	**中止**
21日	水	晴	**19日と20日に予定していた競技を実施**
			タンデムスクラッチ決勝
			4000ｍ団体追抜決勝
22日	木	曇のち雨	個人ロードレース

【競技記録】のべ9日間にわたって繰り広げられた自転車競技は、強豪のヨーロッパ勢が力を発揮し、優秀な成績を収めました。この大会では100分の1秒までを計測可能としたSEIKOの記録機器が導入された一方で、ロードレースでは途中経過の実況・報告が市民ボランティアの奉仕隊放送班によって随時提供されました。技術と人の力によって支えられた大会は成功裡に終わり、この自転車競技においては日本選手の奮闘も虚しく、日の丸を揚げることは出来ませんでしたが、それにもまして、「歓迎日本一」と報道された市民の真心の歓迎は、八王子を訪れた世界の人々の胸に残ったことと思います。

スクラッチレース	22ヵ国 39人出場	備考
①G．ペテネーラ／イタリア		
②S．ビアンケット／イタリア		
③D．モルロン／フランス		
佐藤勝彦		2次予選敗者復活戦 3位失格
河内　剛		1次予選敗者復活戦 失格

タンデムスクラッチ	13ヵ国 13チーム出場	備考
①A．ダミアーノ／S．ビアンケット／イタリア		
②I．ボドニエクス／V．ログノフ／ソビエト		
③W．フッゲラー／K．コブッシュ／ドイツ		
手嶋敏光・斑目秀雄／日本		敗者復活戦敗退

4000m個人追抜	27ヵ国 27人出場	備考
①J．ダレル／チェコ	5′　04″　75	決勝記録
②G．ウルシ／イタリア	5′　05″　96	決勝記録
③P．イサクソン／デンマーク	5′　01″　90	
山藤浩三／日本	5′　17″　57	予選失格

4000m団体追抜	18ヵ国 18チーム出場	備考
①ドイツ	4′　35″　67	決勝記録
②イタリア	4′　35″　74	決勝記録
③オランダ	4′　38″　99	
日本／缶罐範男・伊藤富士夫・高橋耕作・山藤浩三	4′　55″　04	予選失格

個人ロードレース	37ヵ国139人出場／失格46	備考
①M．ツアニン／イタリア	4時間39′　51″　63	
②K．A．ロディアン／デンマーク	4時間39′　51″　65	
③W．ゴーデフロート／ベルギー	4時間39′　51″　74	
36大宮政司／日本	4時間39′　51″　76	
84山尾　裕／日本	5時間10′　40″　00	
85赤松俊郎／日本	5時間27′　10″　00	
辻　昌憲／日本		途中失格

団体ロードレース		備考
①オランダ	2時間26′　31″　19	
②イタリア	2時間26′　55″　39	
③スウェーデン	2時間27′　11″　52	
19日本／大宮政志・加藤武久・志村義夫・福原広次	2時間40′　13″　27	

《八王子の文化財》 清鏡寺の豊臣秀吉禁制（きんぜい）

禁制（きんぜい）とは、禁止事項を公示する文書のことです。制札、禁札とも言われます。特に戦国時代、社寺や村などが、自分たちの住む土地にやってくる軍勢の乱暴を防ぐため、その司令官である武将に謝礼を払って禁制を下してもらうことが多かったようです。

市内大塚にある清鏡寺には、豊臣秀吉の禁制が伝えられています。約45㎝×66㎝の檀紙に書かれており、宛先は「武蔵国多西郡内油儀郷」。油儀は「ゆぎ」の当て字で、由木郷は現在の市内上柚木・下柚木・大塚などを含む範囲を指します。内容は、一.兵士の乱暴狼藉（ろうぜき）、二.放火、三.土地の百姓などに対して無理難題をいうこと、の3カ条を禁じ、違反したものは厳罰に処す、と結ばれています。最後に「天正十八年五月日」とあり、捺された朱印の印影から秀吉の発給文書であることが判ります。市内に残る貴重な歴史資料の一つであるとして、平成23年8月24日に八王子市の有形文化財（古文書）に指定されました。

天正18年（1590）、豊臣秀吉は全国統一の総仕上げとして、小田原北条氏に兵を差し向けます。秀吉自身は3月1日に京都を出発し、4月5日には箱根に到着。早雲寺に本陣を置いて小田原城包囲網を固めつつ、関東各地の北条氏傘下の城に向けて軍勢を差し向けます。人びとは自分たちの安全確保のために求めたのでしょう。4月以降、相模に発給された豊臣方の禁制が、相模国内や武蔵国の南部地域に今でも多く残っています。

清鏡寺の禁制は、5月に発給されています。八王子城の落城が6月ですから、まさに秀吉の軍勢到来目前という差し迫った時期にあたります。由木の地は八王子城から少々離れており、直接の戦場にはならないかも知れませんが、来るべき争乱に備える必要が迫っていました。

その辺りの事情は、『武蔵名勝図会』に詳しく紹介されています（『新編武蔵国風土記稿』にも簡単に記されています）。

慶安元年（1648）の11月に、清鏡寺の本寺であった永林寺の住僧が、寺社奉行所に提出した書類の控えがあり、それによると、小田原征討の際、柚木領の民衆が寺の敷地内に小屋掛して避難してきたので、彼らと寺を守るために当時の清鏡寺住僧だった宗銀が小田原城を包囲する秀吉の陣まで出向いてこの禁制を貰い受け、門前に立てておいた。これによって民衆は戦乱から守られた、ということです。

この禁制は、戦国の動乱期に一人の僧侶が、寺だけでなく地域の住民を守るために行動した証です。400余年の歳月の中で、清鏡寺も周辺の風景も変わりましたが、この資料は当時の姿をほぼとどめて、今でも大切に伝えられています。（河）

【朱印部分の拡大】

※通常は、非公開です。